九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

正解のない問いに取り組むために

佐々木，玲仁
九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター

https://doi.org/10.15017/1448789

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 2, pp.1-2, 2010-12-24. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

九州大学総合臨床心理研究，第2巻 2010，1－2頁
Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University, 2010, Vol.2, pp.1－2

正解のない問いに取り組むために

佐々木　玲仁

バレエダンサーの岩田守弘は、インタビューに答えてこんなことを言っている。*1
「舞台では絶対その人が見えちゃう。丸見えですね。」

舞台で踊るバレエダンサーがどんな人か、今何を考えているのか。格好よく見せるだけの人と本当に格好いい人。計算しているとか優しい人だとか、そういったことがすべて丸見えになるというのである。同じくバレエダンサーの吉田都もほぼ同じことを言っていて、バレエダンサーの仕事はよくよくその一瞬一瞬にそれまで生きてきたすべてが表れてしまうらしい。

我々の仕事は、それではどうなのだろうか。心理臨床の現場でクライエントと対峙しているとき、そこにはそれぞれのセラピストがこれまでどのように生きてきたかということが表れないと考える理由は何かあるだろうか。もし表れるのだとしたら、良いセラピストになるためにはどうしたらよいのだろうか、と考える。

正解のない問いに取り組むときには、いくつかの方法がある。

一つ目は、誰か別の人の決めた正解をもらってきて、それを自分の正解にするという方法である。自分よりも賢い人が考え出してくれたことをもらってくるのだから安心だ。それに、とても楽で効率がいい。ただ、ある問題について「正しい」答えを出してくれた人のいうことはそれ以後全部正しく聞こえてしまうから、注意が必要だ。気をつけよう。

二つ目は、誰か別の人が示した方向に向かって、どうしたらいいのかを自分で考えるという方法だ。正解は教えてもらえない。でも、どちらの方向に進んでいったら良いのかは教えてもらえるから、ただひたすらにその方向に進んでいけばいい。腕力勝負だ。この方法は持っている力で一番遠くまで行けるかも知れない。でも、ある方向にひたすら進んでいくと、道端に落ちているもっと良さそうな答えを見過ごしてしまうかもしれない。そうなってはもったいない。

次は三つ目。自分が属している集団の中で正解とされているものを正解として受け容れるという方法だ。一つ目の方法と似ているが、違うのはその正解を誰が言っているかがはっきりしないところだ。誰が言っているかははっきりしないが、その集団の中にいる限り、周りの誰に聞いても同じ答えが返ってくるわけだから、とても安心できる。その「正解」は、集団の外にも通用するかどうかはわからない。進化の袋小路に迷い込んだ絶滅危惧種のようになることもないわけではない。それはそれでとても貴重だし、保護の対象として大事にしていかなければならない。それから、集団の中での正解に染まっていると、そこにいる年月が長い人間の言うことが通りやすくなってしま

うという一般法則がある。長く同じ場所にいると、威張ってみたくなるものらしい。いずれにしても、集団だけに難しい。

続いて四番目。自分がどこかでこれが正解というものを決めてしまって、それ以後はそこで決めたことを基準にやっていくというやりかただ。自分が直面している問題については自分が一番良く知っているということを信じて、いわば決め打ちをしていくわけだ。決め打ちは通ると強いが、外れると目も当てられない。それと、自分の直面している問題について自分が一番解っていない、ということも特に珍しいことではない。ただ、決め打ちしかしようのない場面というのは意外に多い。そういう場面はできることならそうなる前に避けたいものだ。

五番目の方法としては、とりあえず次の一歩をどこに置くかだけを考えて一歩を踏み出して、踏み出した先でまた次の一歩を考える、以下、これを繰り返す、というものがある。この方法は、正解があるということを前提にしないところが前の四つとは違っている。次の一歩を踏み出すのには、正解があろうがなかろうがあまり関係が無い。ただその一瞬だけに集中して、結果がどうなってもそれは結果として受け容れるということになる。この方法はとても不安だ。そして、おそろしい。でも、取り組んでいるのは実は正解がない問題なのだから、無理に正解を設定しないということは、実はとても正直な態度ではある。「後で振り返ってみたら結果的にはそれほど悪い道程ではなかったと思える」というあたりを最高の結果だということにして、気勢が上がらないまま何とか歩き続けるというのは楽ではないけれど。

最後の六番目。何も考えない。ある意味、最強の方法ではある。

いくつか方法を挙げてきたが、さて、この中でどれをとるのが一番いいのだろうか。どれをとるのが正解だろうか。もちろん、この問い自体も正解のない問いであって、どれをとるかもこの中の方法のどれかを選択しなければならない。誠にややこしい話である。

私としては、五番目にほんの少しだけ二番目を混ぜるというのが好みではある。しかし、もしこれを読んでその通りにしようとする人がいたとしたら、その人はすでに一番目の方法を選択している。本当にややこしいのだが、この程度のややこしさが嫌いな人は、臨床家にはあまり向いていないのではないだろうか。もちろん、そういう人が向いているかどうかというのも正解のない問いである。

正解のない問いを考えるときに、いつも思い出す言葉がある。動物写真家の星野道夫が小学生のときに卒業アルバムに書いた言葉である。*2 44歳で急逝した彼が12歳のときにこの言葉を書いた真意を問うことは、もうできない。ただ、言葉はそこにあり、そこから何かを受け取る我々がここにいるだけである。

浅き川も、深く渡れ

*1 NHK「プロフェッショナル」(2008.12.9放送)
*2 NHK「アラスカ　星のような物語」(2006.7.24放送)